

其に第一、あのふさくした尾の重さがなくなる  
これは、全く餘計なものだからなわ』など、いつ  
て居ると、一匹の狐が、言ひますには、『然し、君  
が自分で尾を無しさへせねば、僕等に其んな相談  
はしないのでしよう』

其卅九 獅子の戀

一匹の獅子が、樵夫の娘をお嫁にくれといつて來  
ました。お父つあんは、無論獅子などに娘をやり  
たくはありませせん、が、夫かといつて、やらない  
と言ふのも恐いし、どうしたらいいかと考へて、  
やうく其計略を見つけました。先づ獅子に、た  
つた一つ此方の言ふ事を聞いてくれ、ば、喜んで  
娘の婿さんにしませうといひました、其一つとい  
ふのは、娘は、獅子の齒と爪とが大嫌ひだといふ  
から、どうか、其おわたの齒と爪とを取つて、し

まつて下さいといつたのです、そこで獅子は、自  
分の好きなお嫁さんが貰へることだと思つて、な  
わに此位の事ならといつて、早速其齒と爪とを切  
つて仕舞つて、さて、約束通りにしたから、娘を  
下さいと申し出た所が、今度は樵夫は、もう恐く  
はありませんから、いきなり太い棒を持つて來て  
森の方へ逐つ拂つてやりましたとさ。

お笑ひの種

三河境川水邊

近藤とき子

或る寺に三人の小僧がありました。三人とも仲々  
伶俐者でしたから、和尚も未頼母しく想ひ喜んで  
居られます。或日の事、檀家それがしから牡丹餅  
を九つ貰ひましたから、直ぐ和尚は、小僧を膝近  
く呼びよせ、小僧や、今檀家の内からこんな珍ら

しい物を貰ひましたで、一しよに喰べ様ではない  
 か 小僧等「其れはかいしもの、では和尚さん早速  
 喰べませう」と、直ぐ手をかける 和尚「イヤ小僧等  
 待て、狼狽るな、狼狽る蟹は穴へ入らずの古言も  
 ある。其れに、一人りで二づ、喰べると、一ッ餘  
 ると云ふ勘定、其の餘りの處置には此の和尚も頓  
 と困まるて」小僧等「和尚さん其の處置には御心配  
 は入りません、私しが喰べますから」と、各々聲を  
 上げて噪ぎます、和尚、實は餘りの一つは自分に  
 喰べる積りで、餘りの處置はと問ふたのは、畢竟  
 小僧等に「夫は和尚さんれ上りなさい」と謂はしめ  
 る計策であつたのが、案外に違つたから、大に失  
 望手を拱ねいて居りました。彌々あつて、和尚「其  
 れでは小僧、皆な喰べたい人許りであるから、切  
 り分ける事にしよう、いや其れも餘り賤い様であ

るから、此の和尚が一つ歌題として、下の句即ち  
 「きりたくもわりきりたくもなし」と云ふのを出す  
 から、上の句甘く付けたものに與へる事にしよう』  
 と、謂はれますと、小僧等は互に顔を見合せて居  
 ましたが、兎角する内 兄小僧「和尚さん甘く出来  
 ましたどうでしょう、

「玉手箱、硯に餘る筆の軸

切りたくもわり切りたくもなし」

中小僧「否や和尚さん、私のが些と甘いでしょう、

「鶯の、踏み暴らしたる梅の枝

切りたくもわり切りたくもなし」

末小僧「和尚さん、二人りの付けたのは興味はあり  
 ますが、活潑な處がありませんではないか、私し  
 のが好うございませう

「牡丹餅を、吝じ和尚の生首を

切りたくもあり切りたくもなし」  
と、さすがの和尚も、此の歌には吃驚感心、終に  
余りを興へられたとぞ。

●英語入短話

久永童山人投

▲君コレハ九ツ(Nine)はナインですね。

▲此の様子では明日(Tomorrow)は雪がツモロー

よ。

▲あの石(Stone)を落したらストーンと音がした。

▲此頃牝牛を(Cow)心組だよ。

▲あの河にはね君、鰻(Eel)の大きいのがイール

よ。

二千

●英語一口ぼなし ゆ さ 子

職人の子父親に向ひ

子「お父つさん モーニクといふ英語を知て居  
るかえ

父「ナンダ そんな事は朝飯前だよ

子「ぢやー イブニングは

父「エーうるさいな、晩にしようよ

●獨逸の考(もの)

▲私は終日出るいてゐるですが、夫でも家を出

ません、私の名をいつてごらん

▲私の知つてる所に、小さな白い家が在りますが

可笑しいことには、密もなければ戸口もありません、

ですから其家の主人の出でくる時は、い

つも白壁をたゞ破るのです